

令和七年度 オープン入学試験問題

国語

マーク上の注意事項

- 1 HB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って、○の中を正確に塗りつぶすこと。
- 2 答えを直すときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。
- 3 決められた欄以外にマークしたり、記入したりしないこと。

良い例	悪い例
	
	
	
丸囲み	線
点	小さい
うすい	はみ出し

— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（作問の都合上、本文を改めたところがあります。）

伝統的な友情観——すなわち、互いに自律した個人の間で交わされる、古代ギリシャに由来する男性的な友情——において、友達同士が互いを「わかり合う」ことができるのは、「私」が自分と似た人間と友達になるからだ。そのように自分と似た人間と友達になるために、「私」は自分が何者であるかを理解しなければならない。「私」が自分のことを理解していなければ、友達が自分に似ていることもまたわからないからである。友達と「わかり合う」ためには自分のことが「わかる」のでなければならぬ。a^{注1} アリストテレスは、自分自身と友達になることから、他者と友達になることが可能になる、と考えていたが、それは自分のことが「わかる」からこそ他者のことも「わかる」というロジックである。

b、そもそも「わかる」ということ、理解すること——あるいは認識すること——とは、いったい何を意味しているのだろうか。それに対してニーチェ^{注2}は次のように答える。すなわち人間が何かを認識することとは、未知のものを既知のものに置き換えることである。

どういうことだろうか。

たとえば、「私」がドイツに旅行して、そこでシュニッツェルという未知の料理と遭遇したとする。「私」にとってそれは人生ではじめて出会うものであり、食べてみるまでどんな味かわからない。つまり認識できない。c、それを一口食べると、その食感や食材の調理法から、「このシュニッツェルというのは要するにトンカツのようなものだ」と「私」は判断する。このとき、「私」はシュニッツェルという未知の対象を、トンカツという既知の対象に置き換えたことになる。それによって、「私」はシュニッツェルという料理に対する認識を獲得するのである。（中略）

認識するということは、未知を既知に置き換えることだ。そしてそれが意味しているのは、未知のものがもっている新しさを、既知のものによって否定する、ということである。認識することによって、対象は自分がすでに知っているもの、見たことがあるもの、よくある他のものへと変換されてしまう。トンカツとして認識されてしまったら、シュニッツェルの味わいの新鮮

さは薄らいでしまふに違ひない。そのようにして、認識は対象を陳腐なものにしてしまふのである。^B

このような意味での認識の働きが、シュニツェルではなく、自分に向けられるとき、何が起きるのだろうか。^C

「私」が自分を認識するということは、自分のなかにある未知なものを否定し、それを既知なものへと置き換えることを意味する。素直に考えればそうなる。そしてニーチェは、そうした自己認識は必ず失敗する、と考える。なぜなら人間は、そもそも自分が何を考え、何を望んでいるのかを、自分でほとんど意識することができないからだ。ニーチェによれば、人間は、自分でも気づかないままに、様々なことを考え続けているのであり、そこには自分でも意識することのできない未知の部分が潜んでいる。そうであるにもかかわらず、自分のことをわかった気になることは、自分のことを誤解し、それどころか自分を陳腐なものへと貶めることを意味するのだ。ニーチェは次のように説明する。

「……われわれ各人は、自己自身を個人としてできる限り理解し、「自己自身を知る」ことに努める意欲をもつてはいても、結局のところは、自分の中の非個性的なもの、「平均的なもの」ばかりを意識することになる。

（『喜ばしき知恵』）

このような逆説は、受験や就職活動において、自己アピールをしたり、自己分析をしたりしたことがある人なら、誰でも経験することだろう。他人とは異なる自分のオリジナリティを説明しようとすればするほど、出てくる言葉はどこかで聞いたことがあるようなもの、似たり寄ったりなものになってしまう。ニーチェはすべての人間がかけがえのない存在であり、根本的なオリジナリティを持っていると考える。しかし、それを自分で認識できたと思ひ込んだ瞬間に、そうした個性は既知の「平均的なもの」に置き換えられ、失われてしまふのである。

しかもそうした自分の個性が、ずっと同じであり続けるとは限らないし、それどころか一つであるとも限らない。人間は、状況の変化によって性格が変わることもあるし、あるいは同時に矛盾する二つの考え方を持ち、それらが自分のなかでせめぎ

合うこともある。このような特性もまた、自分を認識しようとした途端に、覆い隠されてしまうのである。

人間には、自分でも気づいていない個性があり、その個性は変わりうるものであり、そして多様でもありうる。このような考え方は、人間の人格のうちに、単一で、不変で、誰にでも理解できるような個性があることを否定するものである。人間には自分のことなど認識できない。「私」には自分を誤解することしかできない。そうである以上、「私」が自分と似た他者と友達になろうとしても、「私」はその他者のことも同じように誤解してしまう。こうした発想は、友達を「もう一人の私」として説明したアリストテレスの友情論を、その根本から批判するものである。

このことは、決して、本来なら「私」は他者を理解できるはずなのに、誤解してしまう、ということの意味するわけではない。そもそも私たちには原理的に他者が理解できないのだ。たとえば、「私」がどんなに友達のことをわかった気になっても、友達には、「私」からは決して見ることでできない、決して知る由もない部分が潜んでいる。ニーチェは次のように述べる。

友人について。——まあ一度君自身を相手によく考えてみるがいい、もつとも親しい知人の間でさえ、どんなに感覚が違うか、どんなに意見がわかれているかを、同じ意見でさえ君の友人の頭の中では君の頭の中とは、どんなにまるで違った位置や強さをもっているかを、誤解や敵意ある離反へのきっかけが、どんなに多様に現われてくるかを。

（『人間的、あまりに人間的』）

ずいぶん辛辣な意見のように聞こえるかも知れない。夢も希望もない、人間らしいやさしさを欠いた考え方のように思われるかも知れない。

しかし、ニーチェの立場に従うなら、本当は友達を誤解しているのに、友達をわかった気になることの方が、はるかに友達に対して失礼な態度ということになる。なぜなら、そのように友達をわかった気になることによって、「私」は友達がもつ未

知の部分を否定し、既知のものに置き換えてしまうからである。それによって、友達はどこにでもいる平凡な人、他の人と交換可能な陳腐なものへと貶められる。それはシュニツェルをトンカツと呼ぶことと変わらない。友達の個性を尊重しているように、実は否定しているのである。

そしてこのことは、「私」が友達から理解される場面にも当てはまる。「私」は友達から常に誤解されている。「あなたってこういう人だね」と友達から認識されることがあっても、「私」のなかには、その認識から零れ落ちるものが溢れかえっているからだ。

「私」は友達を誤解せざるをえないし、友達も「私」を誤解せざるをえない。友達同士が「わかり合う」などということは、幻想に過ぎない。そうであるにもかかわらず、私たちがわかり合える関係を友情の理想として捉えるのなら、その幻想は、それによって互いの個性を傷つけあい、相手に対する不信感を抱かせるような、息苦しい関係をもたらす。ニーチェの友情論からこのように考えることができるだろう。

では、友達とはわかり合えないという現実に対して、私たちはどのような態度を取ればよいのだろうか。ニーチェは一つの実践的なアドバイスを示している。それは、友達を「軽く視る^G」ということである。

「軽く視る」ということは、友達を蔑ろ^{ないがし}にすることではない。そうではなく、友達との相互理解に負荷をかけないようにする、そこに寄りかからないようにする、ということだ。たしかに友達は「私」が理解しているのとは違う人間かも知れない、しかし、そうであつたとしても何も問題ではない、そんなことはどうでもよい、という心構えで、友達と関わることだ。そのような心構えがあれば、友達とわかり合えないのだとしても、それは友情にとつて支障にならない。ニーチェの人間観に従う限り、友情とはそうした軽やかな関係として理解されるべきなのである。

(中略)

ニーチェによれば、友達同士が、単に互いを愛するのではなく、互いにより高い「理想」を目指す関係こそが、「友情」と呼ばれるに値するのだ。

注意すべきことがある。それは、このように友情を成り立たせる「理想」が、あくまでも「彼らを超えた理想」であり、友達同士の関係を成り立たせること自体にあるのではない、ということである。ニーチェにとって友情とはそれ自体で価値があるものではない。友達といつまでも関係を継続することが、友情の理想なのではない。そうではなく友情は、その友情を超える理想へと、友達同士を導くものなのだ——彼はそう考えるのである。

もう少し普通の言葉で言い換えるなら、次のように表現できるだろう。私たちが他者と友情を交わすのは、それによって互いに高め合い、成長するためである。そのように、その他者とともに理想へと近づいていきたい、そう願うことが、友情という名の愛に他ならない。

このような意味で他者と友情を交わすとき、「私」がその友達とわかり合っているかどうか、ということは、そもそも問題ではない。友達^Hがどんな人間であろうが、それは友情にとつて関係ない。ニーチェはこのようにして、同質性に基づく伝統的な友情観とは異なる、別の友情の形^Iを提示するのである。

（戸谷洋志『友情を哲学する〜七人の哲学者たちの友情観』）

注1 アリストテレス …… 古代ギリシャの哲学者。（前三八四年〜前三三二年）

注2 ニーチェ …… ドイツの哲学者。（一八四四年〜一九〇〇年）

問一 傍線部A『私』が自分と似た人間と友達になる」ためにはどのようなことが必要ですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 気の合う友達を選び、その友達の好みに合わせて自分自身を友達に似せていくこと。
- 2 自分のことをわかるのと同様に、他人のこともわかってもらうこと。
- 3 自律した個人の間でそれぞれの共通点を認め合い、時間を共有していくこと。
- 4 自分がどのような人間であるのかを理解し、自分自身と友達になること。

問二 空欄

a

c

 に入れる語として最も適するものをそれぞれ選び、マークしなさい。ただし、同じ語が二カ所に入ることはありません。

- 1 それでは
- 2 しかし
- 3 たとえば

問三 傍線部B「認識は対象を陳腐なものにしてしまう」とありますが、本文中の例を説明したものとして最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 ドイツのシュニッツェルという料理を食べたことのない人に、日本のトンカツに味が似ているのだと説明することで、シュニッツェルという未知の料理に対する興味をなくさせてしまうこと。
- 2 ドイツのシュニッツェルという料理を食べて新しい発見をしたとしても、日本にトンカツという似た料理があることを知ると、結局どこの国にも同じような料理があるのだ、というありふれた理解で納得してしまうということ。
- 3 ドイツのシュニッツェルという料理を食べて日本のトンカツに似ていると感じ、未知の存在であったシュニッツェルが既知のトンカツに置き換えられ、シュニッツェルに対して感じられる新しさがなくなってしまうこと。
- 4 ドイツのシュニッツェルという未知の料理に対する新鮮な感覚を、すでに知っている日本のトンカツを食べたときの感覚になぞらえて説明されることで、その食感などを連想し、理解してしまうこと。

問四 傍線部C「自分に向けられるとき、何が起きるのだろうか」とありますが、どのようなことが起きますか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 自分が何を考え、何を望んでいるのかが分からないまま、自分がどのようなもののかを考え続けるようになる。
- 2 自分の中の未知の部分を既知のものに置き換えていくと、自分が平均的な個性のない存在であると思うようになる。
- 3 自分を世の中にある様々な既知のものと重ねて考えて自分のことを分かったように感じ、自分の限界を知ようになる。
- 4 自分のことを理解し、自分の中に未知の部分はないと認識しようとするが、それは不可能なことなので、自己認識に失敗する。

問五 傍線部D「このような逆説」はニーチェのどのような考えを表したものです。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 人が持っている個性はその時々によって変化するものであるから、その変化に注意しなければ、特定してこれが自分のオリジナリティだと決めることはできない、という考え。
- 2 すべての人間は根本的なオリジナリティを持っているが、そのようなオリジナリティも自分のオリジナリティはこういうものだ、と認識された瞬間に失われてしまう、という考え。
- 3 人のオリジナリティを説明する表現に多様性はなく、みな同じような言葉を使わなければならないので、オリジナリティのある人もない人も他人に伝えられる個性は同じになる、という考え。
- 4 人間の個性はとらえどころがなく、一人の人間でも矛盾した性格を合わせ持っているものなので、自分にオリジナリティがあると認識するのは間違っている、という考え。

問六 傍線部E「アリストテレスの友情論を、その根本から批判するもの」とはどのようなことですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

1 「人間の人格は単一で不変なもので、友達との友情は普遍である」というアリストテレスの考えを、ニーチェの「人間の個性は絶えず変化し続ける」という考えが否定している、ということ。

2 「友達の個性を認識し理解することが大事」としたアリストテレスの考えを、ニーチェの「人の個性は誰にも理解できない」という考えが否定している、ということ。

3 友達を「互いに理解しうる自分と似た人間」というアリストテレスの考えを、ニーチェの「人間は自分のことを認識できない」という考えが否定している、ということ。

4 友達は「自分に似た個性のもの同士でなるもの」というアリストテレスの考えを、ニーチェの「相手を誤解したもの同士が友達になれる」という考えが否定している、ということ。

問七 傍線部F「友達の個性を尊重しているようで、実は否定しているのである」とはどのようなことですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

1 友達と自分の共通点を探して理解を深めようとすることは、自分との共通点でしか友達を理解しようとしないので、友達のことを尊重しているとはいえないということ。

2 友達を自分の思っているイメージに重ねて理解しようとすることは、友達の気持ちを考えていないので、友達のことを尊重しているとはいえないということ。

3 友達のオリジナリティを大切にすることが、必ずしもその友達が求めていることと同じとはいえないので、友達のことを尊重しているとはいえないということ。

4 友達のことを分かったような気になることは、友達が持つ未知の部分を認めていないので、友達のことを尊重してはいえないということ。

問八 傍線部G「友達を『軽く視る』」とは、どうすることですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 人間は互いに理解し合えないものとして、友達との相互理解に依存しないで友情を作っていくこと。
- 2 相手を蔑^{さげす}んだり侮^{あなづ}つたりすることなく、相手に尊敬の念を持ちながら友情を作っていくこと。
- 3 友達を「私」が理解しているものとは違うものだとして、互いの距離感を尊重しながら友情を作っていくこと。
- 4 自分と異なる考えの友達を大したことないものと見下しながら友情を作っていくこと。

問九 傍線部H「友達がどんな人間であろうが、それは友情にとって関係ない」とありますが、なぜですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 友情は「彼らを超えた理想」を実現するために存在するものであり、そのためには友達同士の関係を持続させる必要がある、とニーチェは考えているから。

2 友情は、友情そのものに価値があるのではなく、それぞれが人間として成長してゆくのに役立たせるべきものである、とニーチェは考えているから。

3 友情を他者と交わすことで人間は成長し、そこから他者を信頼する心という友情を超えた理想を見いだすことができる、とニーチェは考えているから。

4 友情は、互いを愛することがなくても持続させていけば、互いを成長させてゆくことができるものである、とニーチェは考えているから。

問十 傍線部Ⅰ「別の友情の形」とありますが、これを説明した例として最も適するものを選び、マークしなさい。

1 友達が困難に陥ったときに、同情して甘やかすのではなく、いつそう厳しい状況になるよう追い込んでその困難を乗り越えらるかどうかを試す。

2 友達が抱えている問題に共感し、自分のことのように心配しながらも、冷静に友達の成長に役立つように突き放し、友達関係を見直そうとする。

3 友達が苦悩しているときに、その友達を助けてあげるのではなく、苦悩はその友達のためになるものと考え、本人が乗り越えようとする姿勢を応援する。

4 友達に起こった災難は自分にも起こりうるものとして想定し、友達がどのようにその災難を乗り越えるか観察し、自分の成長に役立てようとする。

問十一 次の各文のうち、本文の内容に合うものには1を、合わないものには2をそれぞれマークしなさい。

A 人は新しいものを認識するのに既知のものを当てはめて理解しようとするが、そのようにして理解したときに、その未知のものの新鮮さは失われてしまう。

B 人間は、自分が何を考え、何を望んでいるのかを意識することができないので、自分を客観的に見るために友達が役立つ、とニーチェは考えている。

C ニーチェの友達に対する考え方は、辛辣で夢も希望もない、人間らしいやさしさを欠いたもののように思われるが、友達関係を良好に保つためには必要なことである。

D 友達を誤解することよりも、わかっていないのに友達を分かったように思うことのほうが友達に対して失礼だ、とニーチェは考えている。

E 互いにより高い「理想」を目指すためには、友情をできるだけ長く継続していく必要がある、とニーチェは考えている。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（作問の都合上、本文を改めたところがあります。）

今は昔、阿蘇注1 あそのなにがしといふ史注2 きくわんありけり。たけ短なりけれども、魂注3はいみじき盗人にてぞありける。家は西の京にありければ、公事注4 くじありて内注5に参りて、夜更けて家注6に帰りけるに、東の中の御門注7 みかどより出でて、車に乗りて大宮下りにやらせて行きけるに、着たる装束をみな解きて、片端よりみなたたみて、車の畳の下注8にうるはしく置きて、その上に畳を敷きて、史は冠をし、したうづを履きて、裸注9になりて車の内注10にゐたり。さて、二条より西様にやらせて行くに、美福門のほどを過ぐる間に、盗人傍らよりはらはらと出で来ぬ。車の轅注11につきて、牛飼ひ童を打てば、童は牛を棄てて逃げぬ。車の後に雑色注12二、三人ありけるも、みな逃げて去注13にけり。盗人寄り来て、車の簾注14を引き開けて見るに、裸にて史ゐたれば、盗人、「あさまし。」と思ひて、「こはいかに。」と問へば、史、「東の大宮にて、かくのごとくなりつる。君達注15寄り来て己注16が装束をばみな召しつ。」と、笏注17を取りて、よき人にも申すやうにかしこまりて答へければ、盗人笑ひて棄てて去注18にけり。その後、史、声を上げて牛飼ひ童をも呼びければ、みな出で来にけり。それよりなむ家に帰りにける。さて妻にこの由を語りければ、妻のいはく、「その盗人にもまさりたりける心にておはしける。」と言ひてぞ笑ひける。まことにいと恐ろしき心なり。装束をみな解きて隠しておきて、しか言はむと思ひける心ばせ、さらに人の思ひ寄るべきことにあらず。この史は、極めたる物言ひにてなむありければ、かくも言ふなりけり、となむ語り伝へたとや。

（『今昔物語集』）

注1 阿蘇 …現在の熊本県。

注2 史 …地方で四番目に偉い役人。

注3 たけ …身長。

注4 公事 …… 朝廷の政務や儀式。公務。

注5 内 …… 内裏。宮中。

注6 したうづ …… 靴下。

注7 轆 …… 馬車・牛車などの前に長く突き出た二本の棒。

注8 雑色 …… 召使。

注9 簾 …… 輿こしや牛車ぎうしやの出入り口に下げたもの。

注10 笏 …… 公的な衣装を着るとき、右手に持つ細長い板。

問一 波線部 a 「家に帰りける」、b 「打てば」、c 「逃げて去にけり」、d 「答へければ」、e 「笑ひける」の主語として最も適するものをそれぞれ次の中から選び、マークしなさい。(同じ選択肢を重複して選択することもあります。)

- | | | | | |
|------|------|--------|---------------|-----|
| 1 雑色 | 2 盗人 | 3 牛飼ひ童 | 4 阿蘇のなにがしといふ史 | 5 妻 |
|------|------|--------|---------------|-----|

問二 傍線部 X 「うるはしく」、Y 「かしこまりて」の意味として最も適するものをそれぞれ 1 ～ 4 の中から選び、マークしなさい。

- | | | | | |
|-----------|---------|--------|----------|-------------|
| X 「うるはしく」 | 1 じれったく | 2 きちんと | 3 みつともなく | 4 いかにもそれらしく |
|-----------|---------|--------|----------|-------------|

- | | | | | |
|------------|---------|-----------|----------|---------|
| Y 「かしこまりて」 | 1 中途半端に | 2 あぐらをかいて | 3 おそれ慎んで | 4 おののいて |
|------------|---------|-----------|----------|---------|

問三 傍線部A「裸になりて車の内にゐたり」とありますが、なぜですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 盗人に物を取られるという、被害に遭うことを免れるため。
- 2 盗人に遭遇しないようにおまじないをおこなったため。
- 3 盗人のことを考えると興奮して熱くなってしまったため。
- 4 車の中が狭いので少しでもくつろごうと思ったため。

問四 傍線部B「『あさまし。』と思ひて」とありますが、誰のどのような様子ですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 盗みを働こうとした盗人の、阿蘇のなにがしといふ史の座っている姿を見て、驚きあきれている様子。
- 2 盗みを働こうとした盗人の、阿蘇のなにがしといふ史のふるえる姿を見て、情けなく感じている様子。
- 3 阿蘇のなにがしといふ史の、突然現れた盗人の姿を見て、不思議に感じている様子。
- 4 阿蘇のなにがしといふ史の、突然現れた盗人の姿を見て、恐怖を感じている様子。

問五 傍線部C「かくのごとく」とありますが、どのようなことですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 盗人に身ぐるみをはがされたということ。
- 2 車に乗ってやって来たということ。
- 3 自ら服を脱いだということ。
- 4 二条から西のほうに進んできたということ。

問六 傍線部D「君達」とは、本来「貴族の子息」という意味の言葉です。「阿蘇のなにがしといふ史」はどのような考えから

このような言葉を用いたと考えられますか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 盗人をも尊く思う気持ちを持っていることを示して相手の良心に訴え、改心させようという考え。
- 2 初めて会った相手に対し、自分も貴族であることを暗に示し強奪を思いとどまらせようという考え。
- 3 盗人に対して敬意を含んだ表現を使うことで、自分の無力さを強調し見逃してもらおうという考え。
- 4 自分が言葉巧みであることを相手に分からせ、自分から強奪することはできないと思わせようという考え。

問七 傍線部E「己が装束をばみな召しつ」とはどういうことですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 召使を呼び寄せて、自分の服を取りに行かせたということ。
- 2 自分の着ていた装束をすべてお取り上げになったということ。
- 3 自分の装束をすべて召使にくれてしまったということ。
- 4 おばの家から自分の服を持って来るよう召使に頼んだということ。

問八 傍線部F「盗人笑ひて棄てて去にけり」とありますが、どういふことですか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 盗人たちは、裸の貴人が丁寧な物言いので話してきたので、おかしくなり何も盗らずに立ち去ってしまったということ。
- 2 盗人たちは、貴人から盗んだ服があまりにも粗末なものだったので、盗んだものを返して立ち去ってしまったということ。
- 3 盗人たちは、冠としたうづだけを身につけた貴人が車に乗っていたので、怖くなってそのまま逃げてしまったということ。
- 4 盗人たちは、貴人が振り回す笏を見て目が回り、自分の着ていた服を脱ぎ捨てて逃げてしまったということ。

問九 傍線部G「それよりなむ家に帰りにける」の「ける」は文末ですが、「なむ」という助詞によって連体形になっています。

このような法則の名称として最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 助詞の法則 2 古文特有の法則 3 古文末の法則 4 係り結びの法則

問十 傍線部H「極めたる物言ひ」とは誰のどのような様子を表していますか。最も適するものを次の中から選び、マークしなさい。

- 1 阿蘇のなにがしといふ史の、先回りして物事を考え、盗人を上手くだました様子。
2 阿蘇のなにがしといふ史の、盗人に対して丁寧な言葉遣いをすることができ様子。
3 阿蘇のなにがしといふ史の妻の、夫のしたことをすべて許容できる心が広い様子。
4 阿蘇のなにがしといふ史の妻の、機知に富んだ夫を誇らしく思う様子。

問十一 次の各文のうち本文の内容に合うものには1を、合わないものには2をそれぞれマークしなさい。

- A 阿蘇のなにがしといふ史は盗人も逃げるほどの大柄の男であった。
B 阿蘇のなにがしといふ史は仕事のために自宅から東の方角に行った。
C 盗人に打たれた牛飼ひ童は怖くなり、牛を捨ててひとりで家に帰ってしまった。
D 阿蘇のなにがしといふ史の妻は、夫を盗人よりも優れていると言った。
E 阿蘇のなにがしといふ史は恐ろしい心の持ち主であったため皆に恐れられた。

三 次の各問に答えなさい。

問一 次の a ～ e の傍線部の敬語の種類として最も適するものをそれぞれ 1 ～ 3 の中から選び、マークしなさい。

- a 会長のおつしやることを理解するのは難しい。
- b 本を読んで差し上げる。
- c このバスは病院前行きではありません。
- d 先生が手紙をお読みになる。
- e 敬愛するアーティストにお目にかかれて光栄です。

- 1 尊敬語
- 2 謙譲語
- 3 丁寧語

問二 次の a ～ e のことわざ・慣用句・故事成語の空欄を埋める一字として、カッコ内の条件に合わないものをそれぞれ 1 ～ 4 の中から選び、マークしなさい。

a	1	□ ^{なす} 茄子は嫁に食わすな	2	□ ^{めづ} 眠眊を覚えず	3	飛んで火にいる□の虫	4	井の中の蛙大□ ^{かわず} を知らず	【季節】
b	1	□ ^{かね} 銭身に付かず	2	□の舞を演じる	3	□死に一生を得る	4	雀 ^{すずめ} □まで踊り忘れず	【数】
c	1	能ある鷹 ^{たか} は□を隠す	2	濡れ□で粟	3	のれんに□押し	4	□振り合うも他生の縁	【身体部位】
d	1	□ ^{へきれき} 天の霹靂	2	□ ^{りん} 鱗に触れる	3	□一点	4	□羽の矢が立つ	【色の種類】
e	1	□からぼたち	2	□子にも衣裳	3	□心あれば水心	4	□に小判	【動物】

問三 次の傍線部 a ～ e の品詞名として最も適するものをそれぞれ 1 ～ 10 の中から選び、マークしなさい。

壁というものがある。こいつ絶対に思想なんぞではない。堅固な物質でできている現実の壁^aです。何のために、壁はあるのか。すくなくとも、空間を仕切るためのものであるわけがない。この狭い地上を、なにゆえにまたこまかく仕切って、光の通路^bをふさぐ必要があるのですか。それでも、壁がげんに空間を仕切っているという事実はどうにもならない。長い間、壁は人間の運動^cにとってずいぶん不便^dな、不屈きなものでした。というのは、位置の固定、すなわち精神の死であつたからです。

(安部公房『壁—S・カルマ氏の犯罪—』)

1	動詞	2	形容詞	3	形容動詞	4	名詞	5	連体詞
6	副詞	7	接続詞	8	感動詞	9	助詞	10	助動詞

問四 次の a ～ e の作品を説明したものとして最も適するものをそれぞれ 1 ～ 6の中から選び、マークしなさい。

- a 万葉集 b 古今和歌集 c 源氏物語 d 方丈記 e 奥の細道

- 1 紫式部の作で、五十四巻からなる雄大な物語。
- 2 おおらかな歌風が特徴である、日本最古の歌集。
- 3 平家の栄華と源平合戦を描いた軍記物語。
- 4 門人の曾良とともに奥州などを巡った紀行文。
- 5 出家した作者が人とすみかの無常を見つめた随筆。
- 6 平安時代に成立した歌集で、紀貫之が仮名序を書いたとされる。

問五 次の a ～ h の傍線部と同じ漢字を含むものとして最も適するものをそれぞれ 1 ～ 3の中から選び、マークしなさい。

- a 名女優のウレいを帯びた表情。

- 1 ユウランバスで都内を観光する。
- 2 彼の行動のあやうさをユウリヨする。
- 3 新たに都市開発事業をユウチする。

b アルバム作りにタズサわる。

1 考えずに行動するケイコウがある。

2 大学でケイザイ学を学ぶ。

3 ライバル会社とテイケイして新商品を出す。

c 過去の例にナラって取り決めをする。

1 ホンポウ初公開の映画。

2 部室にホウコウ剤をまく。

3 西洋の文化をモホウする。

d ソトで食事をすませる。

1 ソガイ感を味わう。

2 カンガイ深い思い出話。

3 ガイトウ箇所_ニ丸をつける。

e ピアノをヒく。

1 過激な宣伝活動はダンアツされる。

2 ダンチョウの思いでリストラに踏み切る。

3 秘密のダンゴウが行われていたようだ。

f 体育大会にキョウケンな肉体自慢が集まった。

1 秋の夜はスコやかに眠ることができる。

2 カタイ木材で組み立てる。

3 彼は知力と体力をカネ備えている。

g ショウニン欲求を抑える。

1 英単語をトナえる。

2 トーストをコがす。

3 お話をウケタマワる。

h 彼女は上昇シコウが強い。

1 政治家をココロザす。

2 家族の暮らしをササえる。

3 様々な可能性をタメす。

